

「先輩と語ろう大学の今とこれから」報告

経済学研究科・准教授 松村真宏

訪問先：大阪府立八尾高等学校

訪問日時：2007年11月29日（木）

1993年3月1日の卒業式以来、実に14年9ヶ月ぶりに母校を訪れた。1995年に迎えた創立100周年記念事業の折に新校舎に建て替えられたため、ユーカリの大樹や狐山など一部を除いて当時の面影はほとんど残っていなかった。しかし、青年体操や八尾高スタuntsといった硬派な伝統は今でも脈々と受け継がれており、卒業生が顔を合わせれば今でも年代を超えた共通の話題となっ



図1. グランドから眺めた校舎

ている。昨年度から毎年開催されている「大阪大学教職員の八尾高校出身者の会」においても、工学研究科長・工学部長の豊田政男教授（八尾高15期生）と理学部4年生の三山啓太君（八尾高55期生）の共通の話題になっていた。

八尾高校は進学校でありながら体育が厳しいことでも有名であったが、現在でも9割を超える生徒が部活動に励み、インターハイ出場やシドニーユースオリンピック出場など優秀な成績を残している。私も高校生の頃は体操部に所属して毎日練習に励んだことが、高校3年間の思い出の大部分を占めている。このように、校舎は一新されていたが校風は当時のまま残っており、確かに八尾高に帰ってきたという実感があった。

「先輩と語ろう大学の今とこれから」では、体育館に集まった1年生320名（40名×8クラス）に向けて「地域に生き、世界に伸びる」と題した50分間の講演を行った。未来への期待と不安を抱いた高校1年生にふさわしい内容を考えた末、私が八尾高校に入学してから現在までの17年間に起こった自分の経験を伝えることができればと思い、人生のターニングポイントとそのときの選択について話した。

自分の経験を振り返ってみると、大阪大学基礎工学部、同大学院基礎工学研究科、東京大学大学院工学系研究科、同大学院情報理工学系研究科、イリノイ大学アーバナシャ

ンペーン校と様々な大学を転々として最終的に大阪大学大学院経済学研究科に着任しており、高校生の時にはこのような人生になるとは夢にも思っていなかった。しかし、結果的には最善の選択肢を選んできた気がする。なので、それぞれのターニングポイントにおいてどのように考えて行動してきたのかについて話した。詳細は省略するが、講演の最後に以下のことについて述べた。



図2 講演風景

- ・ 人生はアクションを起こさないと何が起
こるか分からないため、その時々で最善手を選ぶ必要がある。
- ・ 最善手を選ぶためには選択肢を増やす必要がある。
- ・ では高校1年生である皆さんの最善手は何か？
- ・ 答えは「勉強」。理由は「未来の選択肢」が増えるから。
- ・ 勉強して成績が上がると合格できる大学が増えるため、その中から自分の行きたい大学を選べるようになる。
- ・ 難関大学に進学することができれば卒業後の未来の選択肢が増える。

というような話をした。最後は少し説教じみてしまったが、皆熱心に聞き入ってくれていた。私の経験が少しでも八尾校生のキャリアデザインに役に立てばと思う。

講演後は職員室で勝山正樹教頭と川崎直美先生に八尾高校や大阪府下の高校の近況についてお話を伺った。八尾高校を含む大阪府立の高校は9学区制から4学区制への移行があったり、少子化の影響で生徒数が減ったりなど大きな変化が起こっている。私の頃は第2次ベビーブームの真っ直中だったので1学年は12クラス(550名)だったが、今は1学年8クラス(320名)になっている。第2次ベビーブームのときに高校が乱立したせいで、今は生徒の取り合いとなっており、高校の特色を打ち出す必要に迫られているという。八尾高校でもエル・ハイスクール、エコ・ハイスクールといった指定を取ったり、大阪教育大学との「高大連携」に取り組んだりするなど、積極的に新しいことに取り組んでいるようだ。そのおかげか、近年途絶えていた京都大学への進学者も現れており、新しい取り組みの成果は着実に出てきている。

帰る前に八尾校内をぐるりと一周したところ、すれ違う八尾高生が何人も元気に挨拶してくれた。高校時代の懐かしい思い出を振り返りながら、足取り軽く八尾高校を後にした。